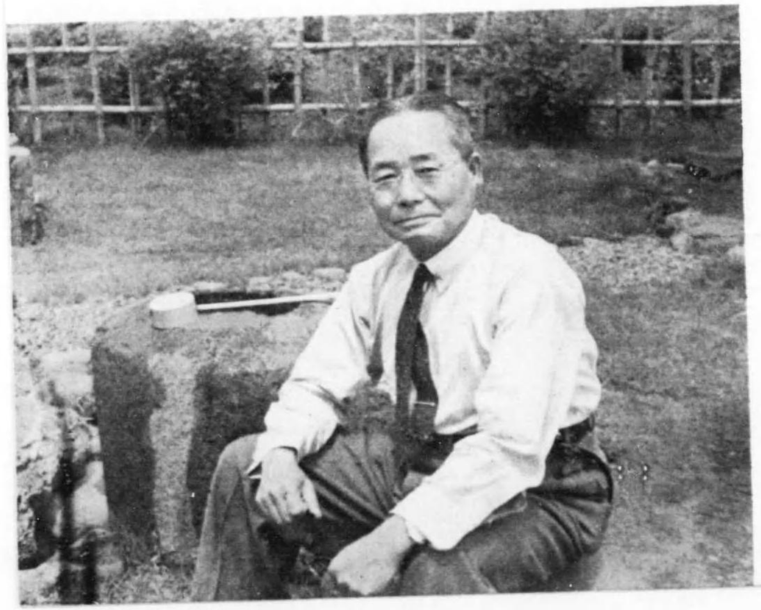
始

裝幀　石井柏亭氏

特233
166

光波子句集



和光庵にて著者

四百八十部限定版
第　　冊

目次

序……島田青峯
自序……光波子
昭和四年
雜詠(一)……三
昭和五年
雜詠(二)……一一
渡歐……一四
昭和六年
雜詠(三)……二一
北海道周遊……二六
雜詠(四)……三〇

昭和七年
雜　詠（五）……三五
昭和八年
アメリカ旅信……三六
丹野本邸……四〇
庭の秋……四一
後樂園大茶會……四三
雜　詠（六）……四三
皇子聖誕……四四
丹野本邸歲晚風景……四五
昭和九年
雜　詠（七）……四六
長姉を喪ふ……四六
雜　詠（八）……五〇
花が散る花が散る……五三

神田祭……五五
北越行……五五
雜　詠（九）……五五
秋の野の幸……五六
大崩と館山寺……五九
雜　詠（一〇）……六〇
昭和十年
雜　詠（一一）……六五
洛北を訪ふ……六七
奈良の雨……六八
雜　詠（一二）……六九
昭和十一年
雜　詠（一三）……七七
白路歸る……八〇
野天風呂……八一
鱒を飼ふ人……八三

漂泊の人……八四
胡沙便り……八五
昭和十二年
雑　詠（一四）……九七
豫算村會……九六
雑　詠（一五）……九七
狗心佛性の秋……一〇一
蒙古包……一〇二
赤い夕陽……一〇四
昭和十三年
和光庵の半日……一〇九
上海旅中……一一〇
昭和十四年
土の香……一一三
一人の弟の死……一一四
卓子……一一五
鶯……一一六
津の娘の新居へ妻と一泊……一一七
雑　詠（一六）……一一八
土と女……一二二
和光庵素描……一二三
昭和十五年
ある日の和光庵……一二七
房州より潮來へ……一二八
雑　詠（一七）……一二九
雑　詠（一八）……一三〇
靜岡大火……一三二
和光庵に椿を焚く半日……一三三
武藏野……一三四
縄暖簾……一三五
雑　詠（一九）……一三六
あとがき……田中波月

序

舊臘押しつまつて牧草平君が來訪されて、今度出版する光波子句集に序文を書くやうにといふ依頼があつたので引受けた。正月も中頃になると、その校正刷が屆けられたが、折悪しく私は風邪の床に就いてゐた。二三日かゝつて一と通り校正刷を拜見したのであるが、思ふやうに味讀することが出來ず、遺憾ながら感じたことも十分書けなかつたのは、まことに著者に對して申しわけのないことであつた。

實のところ私はまだ三橋光波子氏には面識の機會を得てゐないのである。しかしながら光波子門の宮城白路君は早稲田大學の學生であつたから、同君を通じて多少知るところがないでもなかつた。それから光波子主宰、白路編輯の雜誌「しろそう」を月々見ることも出來るやうになつたのであるが、さうかといつて、特に光波子作品を研究するといふのではなかつたから、今この集められた作品を見て、やつと初めて光波子氏の俳句に接したといふのが、全く僞りのない私の氣持であつた。即ち年次を追うて掲げられた作品について、その私の感想の一端をこゝに書きつけることにしようと思ふ。

光波子氏の句作閲歴はかなり古いと聞いてゐるが、この句集には昭和四年以降同十五年までの作品が收められてある。隨分思ひきつて昔のものを取捨てたものであらうと思ふ。新しい作品にしても、相當の取捨選擇が加へられてゐるやうに思はれるのは、著者は元來多作益々辨ずる底の人であらうと想察されるからであるが、果してどうであらうか。

さて、昭和四年の初頭の一句

御大典式場拜觀

霜天に滿つ庭燎に衞士の咳小さし

は、正に光波子作品の典型的なものであらうと思ふ。貴族院議員として、又實業界の有力な一先達としての風丰をこれに見ることが出來るであらう。

時雨るゝや音なく停る貨物汽車

のやうな雅馴な作品もある。

實業界に活躍される人であるから、自然多くの旅行から獲られたものが多い。昭和五年には渡歐されてゐるが、しかし滯歐作品は他の例に見ても、餘り傑出したものを見ることが出來ないのと同樣に佳品は多いといふわけにはいかない。

巴里郊外

葡萄ふくみ唄やめて羊守る兒かな

これなどは好い小品である。

昭和六年には北海道周遊の多數作がある。

釧路途上

移住民の小屋かやあれが蕎麥の花

阿寒湖

鱒を搏つ鷲の腹白き落暉かな

など、誦すべきものがある。

昭和七年にはわづかに三句を錄してゐるに過ぎないのはどうしたのであらう。

昭和八年にはアメリカ旅信があるし、あの石川雅童氏の尺八でおなじみの庭の秋三句がある。

昭和九年の作品中に次のやうな異色のあるものを發見する。

花が散る花が散る

花びらを呑んだり吐いたりお池の鯉

雀の子尻ツボを立てゝ歩いてる

姉ちやんはお花見の着物をたゝんでる

正に口語俳句である。光波子作品中、最も氣のきいたものに屬するのかも知れない。

昭和十年の年頭の一句は昭和四年卷頭の一句にもまさる、その人らしい鷹揚な佳品である。

子女人と成る屠蘇はなみなみと

洛北を訪ふ、奈良の雨等の旅行吟には取りたてゝ云ふほどのものも見あたらない。

このあたりから年々の作品は數を加へて行く。新しい俳句界の運動の餘韻を聽き得るものもふえて來る。

昭和十一年には胡沙便りと題する蒙古地方旅行の吟詠が多數掲げられてあるが、總じて記錄的な範圍を出づることいくばくもないといふやうなものがあつて、詩情のこれに伴ふことの少ないのを憾みとする。

昭和十二年の作

双松學舍主橋本鶴堂先生の村葬

一布衣に死すべかり野梅に埋められて

豫算村會

二讀會火鉢に翳す指の節

などに、作者の面影を見せてゐるのはいゝ。

この年また上海旅中の作がある。

昭和十四年では

東山瓢亭

春の泉滾々として朝の粥白し

凍て土に茶の藥腐る地平の陽

妙の浦

秋の潮蒼海に魚あり巨き鯛

等々すぐれたものがある。

昭和十五年

津の娘の家に泊る

爐に向ふ母となるべき膝頭

父としてのこの作者はまことに親しむべき人であらねばならぬ。

武藏野と題する作品中、他の三句は私は採らないのであるが、次の一句は甚だ立派である。

武藏野に烏あり孤り青き踏む

但し、私のこの句に對する解釋は、全然作者の意圖とは異つたものであるに相違ないと考へる。私は、これを他の句ときりはなしてしまつて、そしてこれから一つの情景を描き出す。

私の解釋は、「武藏野に烏あり」で意味を切るのである。そして「孤り」は作者自身唯ひとりといふ風にとるのである。即ち作者が青を踏んでゐるのである。

しかし作者の作意は無論「孤り」は「烏」御自身をさすのであらうし、烏が青を踏んでゐると擬人化してゐるのであらうと思ふ。私はそれを採らないので、この解釋の相違如何によつて、採否正反對といふ結果が生ずるのである。

ことばの使用のむつかしさといふことを今更のやうに思ふにつけても、著者が今後いよいよ字句練の上にも十分の意を注いで佳品名作をものされんことを希望して、この貧しい一文を終ることにしたい。

昭和十六年正月十九日

嶋田青峯

自序

私には先生がない、初からない、俳人として面識のあるのは地蔵尊、初己兩氏二人ぎりである。それも僅か數年來の事で、この集の序を書いて下さつた青峯先生も實は御顔を知らないのです。だから私の俳句は私丈のもので外に通用しないのかも知れない。

紫露草は十數年世話をしましたが、これには「イズム」の無い事を以て本領として終始した。同人達は自由に自分の持味を以て進退し御互を切磋琢磨したのです。結局私の俳句生活は天涯の一孤客としての存在である。或は紫露草同人達が私の俳友であると同時に私の先生だとも云へやう。

紫露草が靜岡から東京に進出したのは、昨年の四月だつた。同人達の鼻息はすばらしかつたが、直ちに出版法に觸れて發行不能になつた。時恰も紀元二千六百年何から何迄意義深き歳でしたので、かねて同人達が色々と心配して居つてくれた私の句集を公にする事に同意したのです。紫露草所載の私句中から波月、白路、治兵衞が選句したのが此の集である。私が此の句集に少しも觸れなかつたのも私としては當然である。紫露草前の句は一句も殘つて居らない。又その方が善いのです。紫露草既に無し私の句も、もう無いのかも知れない。

於和光庵

光波子

昭和四年

「しろそう」創刊號は、昭和三年十一月五日で、それに

蟷螂の銀屏に吹かるゝ灯のゆらぎ

たゞ一句が載つてゐる。

第二號が昭和四年一月十日發行、それにあるのが

霜天に滿つ庭燎の衛士の咳小さし

の一句である。

昭和四年は九號迄。五十一句の中から拔いた。（枯雪）

雜詠

(一)

御大典式場拜觀（一句）

霜天に滿つ庭燎に衛士の咳小さし

石置場の燈籠を蹴る霙かな

水温む船、女房が髪を解く

木の芽吹く禪堂に坐す僧逞ましき

行く春や幅かけ替へて日記書きぬ

烈日に白布すぐ干る百日紅

濯ぎ盥に文穀浮きぬ莢竹桃

南瓜くれし乳母たゞ老いて他愛なき

吏をやめて南瓜つくれば余憤あり

停車場の車夫は老ばかり旱つゞ

里川の渚に消えて秋に入る

目に消ゆるまで砂丘に白し芒の穂

秋の潮に逆立つ藻草岩怒る

氷屋の空罎に秋の日のありき

置き去られたる藻を踏みて見し海の秋

傘ながら大根引く妻に歸りけり

時雨るゝや音なく停る貨物汽車

たぎる音に心耳又澄む炭をつぐ

賣勳の沙汰があるげな甘藷の粥

朝鮮にて（三句）

鮮人の兒等に取卷かるゝ秋暑し

鮮人は兒澤山なり秋暑し

石獅石人みな向き向きに蟲に佇つ

隊商に霜の關の戸開かれし

燗冷えて秋刀魚小さく膳にあり

昭和五年

總て百十五句、その中から四十句では、かなりの難選である。

最初、選句にあたつて、自傳體にすべきか秀句拔萃とすべきかに就いて、波月、白路と談じ合つたが、結局、好き句を拔かうといふことにしたのである。選句にあたつて作句初年兵の私が加はつたなど、何と考へてもお笑ひもの丶感がしてならぬ、多謝。（治兵衛）

雜　詠　(二)

春曉やぐんぐん伸びる牡丹の芽

桶の蜆みな口開けて陽にありぬ

蛇取りの身構えに動く芒かな

蛇賣つて歸るさ酒壺の色音かな

擲てど灯を戀ふ蟬の一ヶ圖かな

丹野本邸の盆に歸り父の銅像を拜す（二句）

迎火や松に浮き出し父の像

月見草裾にまつはる犬を抱く

切り落す河豚の頭に白雨かな

冷奴に悔なき我を寂しめり

貫十錢の茶を刈つてゐる烈日に

音立てゝ咲く夕顔なりき妻も見し

麥飯と掃かれ足搔きぬ秋の蠅

糸に吊す鬼灯の輪や人は田に

額を打つ野分の篠に鎌をかざす

伊豆山温泉

初秋や眞晝を湯女の衣ほどく

函嶺接待茶屋

白雲や馬喰むに任せて草を刈る

白路來訪

夕顔にまどゐざはめき白路來て

渡歐

敦賀出帆

柿を嚙む唇思ひ欄に寄る

とぐろ巻くワイヤロップや秋の聲

浦鹽↓伯林（十句）

鳥一つとばぬウラルの秋の暮

ちんば馬草喰み遲れ秋の風

時雨るゝやウラル匍ふ汽車蟻のごと

何に怯づシベリアの野菊小さゝや

汽車十日土戀し人の戀しき霙かな

銀漢や寢しづもる顏ありと

雪晴間陽ざしにうとく風車鳴る

雪晴間碁石のやうに牧場の牛

謎の都灯のまたゝきに氷雨ふる

たゞ生きてゐる飢えてゐる冬の人

レーニンの墓に立つ

寒く饑うる人の子に巨人夢まどかかや

巴里郊外

葡萄ふくみ唄やめて羊守る兒かな

マルセイユの旅舍

男手の針につめたきあしたかな

昭和六年

この歳發表の句は二百にあまる。

前年、歐洲の旅を了へ、梅雨の九州旅行から、つゞいてこの夏、北海道一周吟行があるゝれた中に

梅雨晴や櫨に色ある茶の木山

梅雨晴やありたけの布子苔に葺く

梅雨晴の陽眞東や阿蘇の煙

等々逃がした魚は大きいやうな感がする。

（治兵衛）

雜　詠（三）

印度洋上、船内無爲、暑中迎歲（三句）

餅腹の臍の垢見る寢正月

御慶申し白服笑ひ分れけり

雜煮椀かへるいとまや汗を拭く

麗はしき故國に歸る（二句）

旅衣脱ぐや故山の湯豆腐に

蕗の薹も門先に立つてゐたりけり

悼松浦五眼老

鐵幹倒れけり梅一輪の春寒く

富士山が富士川にすべる梨の棚

花壇燃ゆルンペンも混り陽炎へる

春を尻目に牡丹王位に卽きにけり

牡丹崩れつぎ逝く春の大地覆ひけり

妖氣動いて牡丹はらはらと地に舞ひぬ

花屑に耶蘇燈籠を撫してゐぬ

上院議員等と大井川を下る（二句）

下り舟岩鼻を擦る青嵐

舟瀞めば盃をあぐる杜鵑花かな

虹を吐く如露に蘭の花搖れにけり

風速計廻つたり止つたり蟬の鳴く

神官の拍手に蟬尿し去る

栗鼠とんで大搖れにあり今年竹

青梅の落つるにまかせ良寛さま

上り靄の障子に迷ふ明け易き

五月雨や求職の客に降り止まず

梅雨の旅（二句）

梅雨の帆の動くともなし瀬戸の波

梅雨雲をさゝえて太し大鳥居

土用濤に臍洗はせて坐りけり

夏山に鎌捨てゝ寢れば空は廣きかな

北海道周遊

青函連絡船上（二句）

林檎嚙む瞳に蝦夷の山青し

林檎の核擲てば津輕の濤濁る

大沼公園（二句）

水を搏つ鳶の拔毛や風は秋

秋の雲影とすれすれにとぶ駒が岳

小樽郊外

街中に仔馬乳を吻ふ蝦夷の秋

釧路途上（二句）

移住民の小屋かやあれが蕎麥の花

笹野分膽振（ぶり）につきて富士驕る

根室にて（二句）

移民の子に故郷の盆をきかれけり

花野から樹海に雲につゞきけり

弟子屈温泉

アイヌの子が遠く見てゐる踊りかな

屈斜路湖（二句）

湖心たゞ獨木舟一つ秋の雲

野温泉の人向き合ひ默す秋の顏

阿寒湖

鱒を搏つ鷲の腹白き落暉かな

棹に浮く毬藻に秋の水動く

網走捕鯨會社工場

血煙に鯨眞二つや秋暑し

温根湯温泉

肩を打つ湯瀧に蹋む蟲の闇

層雲峡

夜を喰む鷲の瞳を射る流れ星

登別温泉

湯女の聲追分にかすれ星走る

雜詠（四）

九州行（三句）

椰子の實に濱の兒等騷ぎ南風（みなみ）吹く

梅雨晴れの南瓜庇から主家（おもや）まで

砂を搏つ鯛の目けはし梅雨の濱

カヒルギに梅雨の陽のあり波濁る

註　カヒルギは琉球笄とも言ふ。保護植物で九州指宿海岸に叢生せる熱帶植物、高さ八九尺、笄の如き實を蔕下し、黃色の花をつける。

空魚籃の尻に躍るや夏の月

木魚になれて鯉動く靜かや秋の水

蔓枯れの糸瓜のびてゐて今日も暮れたる

柴舟の柴がひらひら宇治の秋

牛車四條を渡る小六月

三日月を打上げてけり宵花火

踏切の棒いらだゝしカンナ燃ゆ

葉鶏頭のむくろに嵐吹きやまず

野より移せし桔梗ともかく咲きにけり

久しぶり丹野本邸に入る

たまに歸る吾に藪蚊の猛るかな

昭和七年

この年は、十一月二十日發行の第二十八號が一つ出ただけで、それに十句載つてゐる。

その中に

昭和七年十月十一日、滿洲行途上、瀨戸内海ハルビン丸

柿と茸を反く旅寢の四度かな

とある。（草平）

雜　詠

（五）

瓜番の瓜の末生りを食ふ秋の顏

朝の誓酌めば他愛なき秋灯

血に醉ひてよろめく秋の蚊搏つべきか

穗波路にざはめいて彼岸詣哉

昭和八年

全部で五十一句。

朝鮮金剛山連吟があり、アメリカ便りがある。旅また旅の年であつたらしい。その中で石川雅童氏による俳句音樂に作曲された連句「庭の秋」三句が作られたのである。

つくばえに蛇穀沈む庭の秋

香を追ふて暮るゝ木犀を見上げゝり

池に伏す萩に茶席の閉されし

（枯雪）

アメリカ旅信

浴衣着て鮎食ひし夢のはかなさよ

見ゆるものたゞ五月涙今日も寢て

冷奴にコートを投げて卓に寄る

新涼の茶漬に顔をまづ寄せむ

丹野本邸

朝風呂の癖まだ止まず秋に入る

獨り煮る茗に燈籠の苔冷ゆる

飛石に蟻あわたゞし初嵐

秋の蝶蜥蜴の口に羽を震ふ

四番茶の莖だち痩せて長屋門

彼岸花ひよろりひよろりと棒立ちに

松に浮く銅像の父よ朝の月

目頭の熱さ押へつゝ螢草

庭の秋

つくばゐに蛇殼沈む庭の秋

香を追ふて暮るゝ木犀を見上げけり

池に伏す萩に茶席の閉されし

後樂園大茶會

茶を錬るや尺八咽ぶ堂の秋

禪師一喝御灯ゆるゝ葉雞頭

香煙の軒に消えゆく木犀花

雜　詠 (六)

鰯雲あの山懸し背戸に寄る

鰯雲母戀し里戀し米を炊く

雞頭にそむきて檢温器抱きけり

獨り者くしやみ罵り冬に入る

宿引の默つて佇つや冬憐

皇子聖誕

霜の月金星を抱き皇子生る

師走風旗吹きちぎれ産聲に

丹野本邸歳晩風景

轍跡米倉に走る霜柱

年貢人に着膨れの兒も狗の子も

子守兒を後先にして神樂なだれ込む

番頭松友翁八十八歳にて本邸を去る

蕎麥かきに人の足らざる夜寒かな

想起亡小杉葉花君

除夜の鐘聽く友へりて酒ぬるき

つなぎ蕎麥ついに屆かず寒く寢し

寢酒にがく年くれ迫る戸のやぶれ

昭和九年

この年發表二百六十句に及ぶ。

百萬石の花の虱か背筋痒ゆ

蚊遣火に臍を燻らせ鮮かな

二十貫智惠廻りかねし裸かな

山肌に巖兀として秋晴るゝ

句もなさず酒癖に秋は更くるかな

萩の散る帶遠く見て妹をかる

白魚の爪黑づめり茸の澁

など、採り落した句に、再び私は頸をひねつてゐる。（治兵衛）

雜　詠

(七)

煙噴けと富士に佇ちけり初日の出

三六會員句もなく老いて屠蘇に坐す

註　三六會は明治三十六年創立の句會思出多し

長姉を喪ふ

告別

覆ひ取れば生ける姉なり羽根布團

納棺

今棺に釘打つてゐる灯冴え返る

茶毘

こみ上げて來るにこらえず凍土蹴る

初七日

嘆佛に頭ころがる凍て疊

雜詠 (八)

默りこくつて麥踏む二人日は祭

拜む氣にもなれぬ地藏よたゞ寒し

拜まれぬ地藏むきむきに寒げなる

藪堇地の神樣のひそとあり

春の星黑船祭すみし町

花が散る花が散る

花びらを呑んだり吐いたりお池の鯉

雀の子尻ッポを立てゝ歩いてる

姉ちやんはお花見の着物をたゝんでる

神田祭

地下鐵の藤にみ輿は憩ひけり

騎馬巡査颯爽としてポプラの芽

北越行

よく眠る男殘雪の峽を汽車は縫ふ

どの岩もみな名を持てり春の海

海女は繪に見るべし春の波寒し

鱒の刺身眞紅に燃えて陽炎へる

越の國の炬燵に花の噂かな

雪の下蠢めいて人の生きてゐる

殘雪や倫落の湯女が國訛

雜詠 (九)

紫陽花や學資に換へし屋敷跡

迎火の芝にくすぶり家ひそと

注ぎ足して妻も行水す隱れ住む

行水や臍の垢見る湯のぬるき

臑の先に蟻こそばゆし水を打つ

扇風機に夕刊踊る縁光る

愚にかえる人間なりしたゞ暑し

足の指なめよる犬に蓮茶飲む

浴衣硬く縁に坐れば犬の寄る

架け並ぶ浴衣合宿に獨り病む

大洗にて（二句）

濤の背にさゞ波くづる月今宵

磯節の唄めそめそと月曇る

秋の野の幸

山嵐にけし飛んで栗の礫なる

茱萸を吸ふ都に住みて二十年

無花果に嗅ぎよる喪家の狗胡亂

林檎の汁誕生の歯を溢れけり

大崩と館山寺

闇を射て魚の腹光る秋の砂

松魚割く出刃の血黑し秋燈下

ぶつ切りの松魚嚙む歯に秋しみる

月と吾と二人なる世を醉ひにけり

雜　詠　(五)

茸狩（三句）

茸の香をのせて懐紙のひらひらと

生のいきみに地を裂く茸の盲目なる

腐るまゝ腐りし茸に峰靜か

うそ寒の足に踏みけり齒拔け猫

秋祭　二句

蒼穹を辷る陽知らず祭り酒

夜は夜ひねもす太鼓神ン嘗むる

雨そぼつ風によろめき殘んの蚊

漸寒や餉器嗅ぎ去りし齒拔猫

昭和十年

総數約百六十句。

この年ごろ、先生に時事俳句の作がある。俳句としても、日記としても、捨て難いものなので、これだけを輯めて、この句集に載せやうかと計つたのだが、頁數その他の都合で別の機會に讓めることゝした。その一、二

ロンドン條約廢棄

金庫とざす音するどかり除夜の鐘

永田軍務局長刺殺さる

峰入りの先達踏みし蝮かな

（白路）

雜詠（二）

丹野本邸元旦（三句）

子女人と成る屠蘇はなみなみと

塵拂ひなど作る所在なさ御元旦

缺餅の袋眞白き二月かな

死の床に侍す

覆ひとれば佛の顏は凍てませり

うからやからに佛は眠る羽根布團

すゝり泣く肩の影浮く凍て疊

長姉一周忌法會

散華白く疊に凍てゝ經咽ぶ

二ゝ月は早く逝け逝け凡夫吾れ

冬の雨小降りに捨てし硝子屑

洛北を訪ふ

寂光院

落葉拾ふ尼樣みづみづし春しぐる

銀閣寺

膝頭小さく茶に坐す水仙花

圓山公園

夜櫻のふくらむ氣配脉々と

清水寺

尿にも似たる音羽の水ぬるむ

奈良の雨

大佛殿

大佛は坊っちゃん顔よ春の雨

三笠山麓

刀研ぐ人は誰かや春の雨暮るゝ

奈良公園

角のない鹿がうようよ春の雨

雜詠 (三)

嫁ぎゆきし娘の雛を祭りけり

宿醉の水貪りぬ鶯に

家を捨つ心うつろに田甫鋤く

鐵筋に人射すくめて春霰

春の霰仁王の眉宇に皺深き

皇太后陛下牧野原行啓（三句）

シルクハット額にはみ込む汗を拭く

おん御手を木の芽によせて言宣しぬ

茶摘女にお御足とめられとめられて

滴りを筧にうけて棲むは誰そ

胸の百合にテーブル・スピーチ脱線す

柴竹四を悼む

梅雨冷えの机に殘る句屑かな

静岡地方大地震

余震來る怯えに蚊帳を高く吊る

白榮の床に坐りて薄日戀ふ

白榮や苔の雫の時折は

縁こげし火鉢大きかり蚊火燃ゆる

消えなんとする蚊火にさびしく心決む

宇都宮にて

日光街道十里を流れ狭霧來る

清巌寺境内

秋雨や塔を流れる錆赤し

雁來紅燃ゆるにまかせ人あらず

白路討匪渡滿

虎の聲きゝて傳へよ秋の男の子

雁來紅燃ゆるに任せ人あらず

石叩き瀞八丁の石疊

鬼怒川温泉

谿の闇に岩嚙む水か秋の聲

昭和十一年

約二百句。この年には蒙古旅行の秀句がある。しろさう十一月號「胡沙便り」の一節に「海拉爾（ハイラル）の西南方百二十哩、漠々たる荒野に浮ぶ夢の如き廟あり、甘珠爾（ガンジュール）といふ。舊の八月二日より五日間市たち滿人百里を參りて是處に店を開く二百軒、蒙古人家族をあげて集る者無慮四千、其數一萬五千人、雜踏未明より深夜に及ぶ。其のスケッチを句に試む、然れ共唯ズンベラボウの荒野、晝は晩秋、夜は霜月の如し、如何にしても物皆日本の歳時記を以て律し難し、句したがつて季感に添はず止む無くたどあるがまゝに吟ず、乞ふ評せよ」

とある。（枯雪）

雜　詠（三）

丹野本邸元旦（四句）

變哲もなく雜煮幾椀もかへにけり

無爲にして化しも得ず寢正月

埋火に餅の子はぜしおかしさよ

埋火や娘は母より大きくて

鋤初め黎明を脱けし烏かな

殘雪を石切る火花刺しにけり

選擧本部風景（三句）

殘雪の雫をりをり電話絶ゆ

吾が黨の天下あらなくに霜夜の氣焔吐く

勳四等の略綬の醜男の蕎麥湯吸ふ

覆ひそれて下崩ゆ獨活の圖太き芽

小禽の群流るゝ如し雪しまき

葉匿れて禽の逆毛に雪しまき

鵯のひた鳴くいづこ雪しゞま

雪の千鳥姿なく鳴く河ひろびろ

冬ざれの戸口に落ちし貸家札

山門に鳩冬ざれて糞かたし

冬ざれの石につまづき空きつ腹

白路歸る

日本の山河五月の青さあり

青き國に五ヶ月の句ほどばしれ

老の膝に身を投ぐ白路皐月燃ゆ

鐵の面照り五ヶ月の闇灯る

初鰹むさぼるに母は見惚れけむ

富士山麓

野天風呂

野天風呂褌を高く枝に懸く

野天風呂ひぐらし蟬に眼をつむる

野天風呂脊筋を匐ひ濃霧來る

鱒を飼ふ人

子と生きて鱒飼ふ男とアッパッパ

水噴けば瓜は踊るよ眞晝間を

老鶯のひねもす鳴きて富士曇る

池を灯し鱒に虫寄せ野風呂焚く

漂泊(さすらひ)の人

漂泊人に路を問はるゝ草いきれ

漂泊人と並み立ち仰ぐ雲の峯

蝶の髢蹈まじとよろめき白百合へ

胡沙便り

蒙古ガンジュッー祭

胡沙に咲く草花いとし唇知らず

胡砂の薊なにに怯ぢてやうつむける

二場外

千疋の駱駝(ぜ)らるゝ落暉燃ゆ

店頭に駱駝を値切る晝の月

地に伏して喇嘛拜す胡女の衣眞紅

市場騎る胡女銀簪に斜陽吸ふ

群集縫ふて馬驅る胡女の指輪の手

羊裂きて血を汲む蒼穹に陽が一つ

同騎して夫婦は若し市場に入る

牛糞の火に肉燒きつ馬を値切る

註 蒙古地方の薪炭は乾燥したる牛糞なり。
蒙古人用磚茶を試賣す

茶の香戀ひ千紫萬紅に胡女群れて

喇嘛の子は賣るものなければうろつきぬ

毛皮賣る婆子一人かも茶を値切る

胡兒裸馬に夕陽を突きて競ひけり

羊一疋を磚茶六枚と交換す

茶に換えし羊なぶりて夕餉待つ

虫の無き秋草原はたゞ眠る

洋煙局（ヤンニンジュ）

阿片を吸ふ家、此の砂漠の中にもある、

阿片吸ふ此の境界に王覇なし

阿片吸ふ劍を捨つれば將種なし

阿片吸ふ苦力となりし掌を見つゝ

阿片吸ふ議容れられず沒法子（メーファーズ）

註 沒法子とは「仕方がねーや」に當る。支那人の人生觀は此の一語に盡く。

賭博場（ドウバクワチャン）

賽躍る白金まろぶ背筋寒む

堂取の振る手あやしき瞳をくすぐ

賽座る眼光の集束にいすくみて

沈默の空氣に壓され金をはる

賽白く走れば息づまるうめきあり

金握る拳硬きに賽彈く

失望も憤怒も知らず賽は自在

渦卷ける煙草に夜寒の灯泣く

寡子（ヤタンズ）

女郎屋である。砂漠の闇の花とは正にこれ。

寒燈に端然として蛾眉長し

明眸の媚に吸はれて壞人消ゆ

註 壞人は蒙古族の士人格

粉黛を檻樓に任せ胡砂冷ゆる

喇嘛是處に馬蹄をひそめ霜更くる

體臭の包(パウ)に溢るゝ星覘く

註 包は蒙古人の小屋なり

成吉思汗(ジンギスカン)の血を沸かせ牛の糞焚く子

天を限る草原に育ち自然の子汝は

子を生めぬ女あはれや裝ひて

昭和十二年

總數二百二十餘句。

この歳、三月と六月と二度滿洲へ。しろ草七月號の「草深便り」に

……だが滿洲も度々の飛脚だと　大體が變化とぼしき歇々廣き單調だから、句にはなか〳〵ならないでせう……

とは書かれてゐるが、「蒙古包のおきふし」一連の作がある。（草平）

雜詠（四）

丹野本邸元旦

人絹は美し工女は白し御元日

錦着て畫ゆく工女のお元日

双松學舍主橋本鶴堂先生の村葬（二句）

一布衣の棺に一天の霙る音

一布衣に死すべかり野梅に埋められて

豫算村會

二讀會火鉢に翳す指の節

洋服の村長豫算會私語につきず

更生は口頭禪豫算は不關焉

寄らしむる豫算封建の性生くる

雜詠（五）

闇の土匍ひ出づるらし蛙呱々

蛙かも更けし枕をはずし聽く

波月病氣全快

蕗の臺地を割る力波月立つ

紫露草同人達と靜岡刑務所見學

鐵の扉のきしみ濠水の影に寒し

同じく浮月楼の茶席に

野人茶に座る春の陽に蒸れて

花吹雪吹き入るに獺ひそみけり

澎湃と何か寄せ來、暮春の机搏つ

掌に牡丹音して崩れけり

蘂の牡丹を毟る氣味知るや

日露戰爭時代の從卒石川安藏氏と三十二年目に逢ふ

紅顏のまぼろしに宵の春昏るゝ

齒の落ちた唇に暮春は寒く泌む

同じく記念撮影

春雨のぬくみ肩寄せて座りけり

靜岡郊外に濠漉池音しろ草同人達と

夏に入れば清澄に水泡生れつゞく

心魂に滲るものきよら木の芽風

茅花ほうけ足がごろごろ横たはる

しろ草同人達と安部川堤上に酌む

青草に染りし足袋ゆ酒に立つ

セルに透けて胸まろやかに酌をとる

草の香の青みし指に盃を

筏乗る五ヶ月の雲瀬を荒み

狗心佛性の秋

石山寺

雨を呼ぶ海五ヶ月の湖昏し

三井寺

辨慶の鐘撫して見る皐月冷

紀三井寺

片男波青葉に透ける朱印捺す

高野山宿房

杜鵑あかとき冷えの手水鉢

奈良興福寺

孕み鹿まろ寝の床に春暮るゝ

蒙古包（ハイラルの四十里チンバル虎塲の蒙古部）

落に日系官吏F氏夫妻を訪ふ

梅雨あらぶ包に新妻は裙を高く

梅雨しぶく包に金文字何全集

梅雨犯す戸にすがり居り包の妻

二人きりの世現實の夢を包に棲む

雲入道地平匍ひ出づまろき地球

梅雨くらし畫のランプの芯を捻る

蒙古人に代りて

嘘つかぬ羊と草と吾と地と

星や草天地のもと羊孕む

赤い夕陽

三十年前青年見習士官として征露柳樹屯に上陸した夕暮のショックは未だ消えない安州城外に立つ

赤い夕陽が三日月を上げぬ地や空

赤い夕陽が忠靈塔をしむ

赤い夕陽がわが振る劍を染めしことも

赤い夕陽が安坊と瓜を喰みしことも

註 安坊は日露戰役從軍當時の從卒

赤い夕陽が山河たゞある國を彩る

赤い夕陽が國の亡き子等唄はしむ

昭和十三年

……大體私がスランプ狀態に陷つて居た處へ、お茶も非常時の荒濤に揉みに揉まれ……と六月號の「草深だより」にあるやうに、一月號に

神苑の雪に裂かれて松の肌

四月號には

肉ふとく白きを並みて田螺堀る

木蓮は黎明に溶けて老樹なる

があるだけ、あとは十一號迄句作無し。茶業のため滿洲へ、蒙古へ、上海へ。（治兵衛）

和光庵の半日

（和光庵は故徳川家達公命名の著者別墅）

露路笠を干せば蟋蟀渡りけり

枯芝に穴掘る蜂吾を顧ず

芝くゞる蟋蟀の鬚つまみみる

百舌鳥の贄口あひて落日に脚を垂る

上海旅中

苦力がごろごろバンドに月走る

注 バンドは白渡橋より黄浦江に沿ひて走る大道路

曉冷を寝がえれば街に苦力吼ゆ

明治節長江悠々秋流る

エレベーターに銀狐をたらし腋臭抱く

昭和十四年

スランプを脱出して、再び意氣軒昂の感がある。

この年句約二百。

だが、誰にも、何にも撮らぬ、いはゆる光波子句と同じく、獨り格を組み、孤り石を据ふてふ「和光庵」に

石据らず頬にくすがる片時雨

石据らず擲つ蜜柑夕燒に

と一木一草の布置を惱んだ。（治兵衛）

土の香

牛の屁に田を鋤く男吾も百姓

牛と田を鋤く國防禊姦しく行く

十五圓の米は年貢空腹に乾田うつ

おだらり

頸脚ぬけしおだらりに火桶抱く

一人の弟の死

自我といふもの忘れし骸佛なり

生れながら善なる骸佛なり

一月八日雪中埋骨

雪しまき墓標の木の香目に痛き

末女千壽子結婚式

喉(の)頸(くび)刺す冷酒になにか堪ゆる肝

奪はるゝ寂しさ振袖の牡丹燃ゆ

卓(しっぽく)

袱(ぼく)（長崎料理を卓袱と言ふ）

寒牡丹東坡肉の白、赤、黄

寒牡丹の巨口晶子の歌細し

寒牡丹鯛さしの肌鹿の子の緋

寒牡丹福羽の血汐ぽたりぽたり

鶯

鶯の聲とゝのはざるに微醺あり

無爲にして化す一ト日かなホウホケキヨ

いつはりの世に生き鶯に夫婦あり

津の娘の新居へ妻と一泊

春眠を包みしさらの衾の香

新らしきたつき木の香ある家の三月

春光に透き煮沸器（パーコレーター）ふつふつと

四つの顔見合ふ親子に春光る

孕みじやこ嚙みて阿漕の波を戀ふ

雜詠（六）

つくばゐの滓かけば春光に波溶けぬ

春光の土に食み入り芝さめず

川獺の近眼睫毛を氷らしむ

勝太郎を酒席に聽く（二句）

緋毛氈に金鈴まろび宵の春爛る

寂莫と並み居れば春灯に沈む姫

辨當函食ひつく背へ晝電が

蒼い顔机に埋れ、晝電と春雨と

春雨へ畫電がタイピストの襟白粉

京都東山瓢亭

春の泉滾々として朝の粥白し

大井川下り（二句）

天かけり青葉に浮きて橋吊らる

老鶯に躑躅爛れて船澪へ

吐息また梅雨雲の重壓に潰えけり

六月一日鮎くれに來し滿てる笑

土と女

田を打つはかぼそき腕人歸らず

田を打てば乳房痛かりまぼろしに

隣り田に軍事郵便、今日も田打

和光庵素描

芝と闘ふ鋏を投げて汗に降る

萩搖るゝ氣配猫の眼けはし又瞑る

栗こぼる何處高きに法師蟬

虫籠に夕餉の膳を一つ置く

茶の花のこぼれしを抱き秋の蝶

爐を開きむすび嚙りて人を欲る

石据らず舌刺す煙草枯芝に

組み終へて石にものいふ秋の汗

蜜柑山へ浮き出し富士に石据はる

昭和十五年

この年の總句集數は百二十ばかりである。この頃先生は

鶯の倦まずも庵を廻るかな

を〝これが僕の句の落つくところかも知れん〟と言はれたとき、いや

水の酒春宵孤り世に敗る

朝寢朝湯鶯に世を詔らず

といつた方が光波子句領の面目だと治兵衛が抗議したことがある。いづれかは知らぬが、藝術に完璧はない。（枯雪）

ある日の和光庵

路地に踏む茶の花霜とくづれしを

天が下釜の音あり笹鳴す

凍て土に茶の蘂腐る地平の陽

白路除除和光庵に來る

默々と炭の衣搔きたゞ滿つる

房州より潮來へ

清澄寺に登る

通草喰む道のへの兒に憩ひけり

妙の浦

秋の潮蒼海に魚あり巨き鯛

香取大社

海の王者死餌に浮き來秋の鯛

殿深く斧こだまして時雨來る

潮來十二橋

秋雨に蓆織る島の娘ふりむかず

山茶花にくゞり終りぬ十二橋

雜詠 (七)

丹野本邸

障子繕ふなにかぶつぶつ男一疋

亡友江川氏三周忌(二句)

蠟涙の走る寸余に氷りけり

曼々と木魚心耳に凍て刺さる

卅一日丹野本邸に歸る

大根蕎麥爐の四方より食みうから

土間の隅注連絢ふ三代を出入して

雜　詠（六）

田舍の興亜奉公日の元日

餅の角燒きなど元日の眞晝なる

苔踏んで蕎雀（あをじ）寄り來ぬ禮者顏

一月十二日伊勢大社參拜

初參り赤福餅など壺燒と

初參り二見に曲る海・老の朱

津の娘の家に泊る

爐に向ふ母となるべき膝頭

男女ともわかぬ產衣を爐にかざす

靜岡大火

劫火驅る妖しき月よ蒲團かぶれ

癈墟來るマスク彼なりき焦土蹴る

灰に佇つ夢三十年の鼻氷柱

燒野ヶ原靜岡

二ヶ月の富士焦土にバラック置く

着膨の兒にバラックの羽目を打つ

和共庵に榾を焚く半日

榾を焚き〳〵聖戰に遠く座す

榾を焚き〳〵若き血に征きし日を

榾焚いて愚にかえり紀元二千六百年

武藏野

春光をさしまねき女神驚佇てり

白鷺の脛武藏野の水をぬるめ居り

武藏野に烏あり孤り青き蹈む

烏勘左衞門、武藏野の春を啄く孤り

繩暖簾

マダームに美を論じ春宵のおでん冷ゆ

春灯におでん食ふ妻くれし錢

春宵のおでん屋又月給をいふ男

繩暖簾出づれば人間動き居りおれの春

雜詠（元）

林芙美子女史和光庵に來る（二句）

茶筌ひく障子に鶯の寄るけはひ

鶯の倦まずも庵を廻るかな

眞鶴岬（二句）

鰒提灯悔なき面よ春に浮く

海蛇の皮剝がれ春光にしたしまず

牧の原飛行場

土に生れ土を追はるゝ別れ霜

津の娘の家を訪ふ

薫風に孩子抱かせん來よと言ふ

京の夢（二句）

水あれば人あり釣す花菜野や

花曇り煤煙の街に來て產まず

津の娘初產を見舞ふ（三句）

眞白きに赤きもの轉け世に十日

胡瓜苗茄子苗襁褓の風に育つ

ポチじやれて孩子の幌蚊帳犯さんず

大井川原夏

鮎雜炊すゝるうなじへ狐雨

初めて鎌倉の大佛を見る（二句）

大佛にたまぎる顎首夏の陽へ

天地に端麗とほとけ風薰らしむ

夏日選擧

韋駄天の脛太く組めば汗ポタリ

額の汗疊に吸はせ・堪ゆる吾

餓虎人の肉にあたれば綠陰へ

土用濤に鬪志疼く胸を披く

この時の政にさはる夢短夜

旱雲ひた欲る影の今日もなき

勞働の裸形上院の椅子を指す

函崎大社に詣る

秋雨にひれ伏す母性戰へり

丹野本邸

牡丹咲かず不在地主に似たる吾

紀元二千六百年の觀艦式に長門艦上にも

秋の海うづめつくせり艦の御艦

あとがき

光波子俳句集がいよいよ上梓されることになつた。私たちにとつて近來の快事である。私が光波子先生の知遇を得たのは先生主宰「紫露草」を介しての上で既に十年にならうとしてゐる。私はこの間、屢々批評を命ぜられて書いたが、何時の場合も光波子俳句から享けとるものは「人間」といふにほひであつた。それも巷間瑣瑣と浮浪する生活叫喚や悲鳴でないことは勿論で、どつしりとした地位から、思想から、對象そのものを「人間化」せしめてゐるのである。光波子の一睨みに合つた對象は、それが自然現象であつても、ころりと人間的なこゑを立てるのが常である。光波子技術の鑿の性能はまた大膽なのが特長でもある。含蓄に富んでゐながら、微塵の卑俗きのない「人間」のにほひは、いちめん支那蘭の花の香に例へても不當でない。いくつもの部屋を超して馥郁と、おほくのひとをもつつむちからは或る意味に高貴的である。

×

私は先生の「自信句だ」とハツキリ示された句を憶えてゐる。先生が自信句だと云はれる句が、不思議に私にも深く共鳴され、何かしら歩み寄つた一つの境地といつたものを感ずるのである。私はかうした場合、先生の人間的主張が、いみじくも「自然

へ！」の渇仰のこころであることを知るのである。

はらみぢやこ嚙みて阿漕の波を戀ふ（津にて）

掌に牡丹音してくづれけり（丹野本邸にて）

蟻涙の走る寸餘に氷りけり（亡友江川氏追悼）

はらみ鹿まろ寐の床に春暮るる（三笠山にて）

鋤初黎明を脱けし烏かな（丹野にて）

光波子技術の鑿は、對象の僞裝をつき破つて進んで或る一點に達した刹那、ポロッと大地に捨てられる。愛情のこゑはうつくしい自然のふところのなかで、凱歌さながらのリズムを奏でではじめるのである、

私は嘗て先生から贈られた一對の瓶子の一方に書かれた

掌に牡丹音してくづれけり　光波子

に應へて

うつくしきふところを見る勝者の眼　波月

と詠じた。

先生の「鑿」は劍士の劍にたぐひするものやうだが、劍と鑿とはあきらかにちがふ片手に槌を必要とする鑿の構えは、一見無法則にみえるほど素朴である。いかにも切

るぞ、突くぞの構えはないが、いつとはなく現實のどこかを彫りあげておもしろい人間の像を創つてゆく——光波子は、いくつもいくつも人間の像をつくりゆきながら、さう爲ることによつてのみはじめて大自然のいのちに融け得ると信ずる側の人だ。

×

私は光波子句集の價値を、敢て現在の俳壇に問はうとしない。光波子的人間主張、光波子的俳句表現技術は、俳壇といふ小縄張りのなかにすつぽりおとなしく蹋んでゐるやうなものとちがつて、生きた世界、生きた現實の上に太い足を踏まへて縄張りなどに何等眼をくれてゐない。光波子句集の價値批判を、ただひろく「人間」の前に提出せんとする私たちの意がある。

×

私は昨秋上京、一枚の風呂敷に白路・枯雪・草平の作つたこの光波子句集の草稿をかかへて帝都のただなかを句に酒にと半月を過した。あたたかい同志の友情にひたつていちめんどんなにか人間光波子の偉力、魅力にうたれたかしれない。草稿の重みを意識しながら、私は幾度か世にも「大切なもの」を感じた。いつの世にもその路傍にころがつてゐるやうなものではない。

直接、編輯に當つてくれた治共衛・枯雪・草平・白路の諸氏の勞を多とする。

昭和十六年五月十二日
靜岡草深に「葉櫻に杯をなげうてり馬鹿だなあ　光波子」
の近作を示されて來た翌日

田中波月記

昭和十六年六月二十日　印刷
昭和十六年六月三十日　發行　非賣品

著作者　三橋四郎次　靜岡市西草深町百十七番地
發行者　千葉門　東京市芝區濱松町一丁目十五番地

印刷者　スター印刷株式會社　東京市芝區濱松町一丁目十五番地
印刷所

411
427

裝幀　石井柏亭氏

終